2024.10
vol.133

国際交流活動ニュース

MACROCOSM

CONTENTS

一般財団法人青少年国際交流推進センター理事長挨拶 2
事業報告　国際交流リーダー養成セミナー 3
事業報告　青少年国際交流スタディツアー 4
事業報告　イスラームを知ろう！セミナー開催報告 6
事業報告　国際理解教育支援プログラム 8
事業報告　内閣府等の実施する青年国際交流事業への協力 9
「ブロックイベント」及び「青少年国際交流全国フォーラム」 10

一般財団法人 青少年国際交流推進センター

一般財団法人青少年国際交流推進センター理事長挨拶

一般財団法人青少年国際交流推進センター
理事長　駒形　健一

推進センターは今年、30周年を迎えました。1994年4月に設立されてから長い年月が経過した感がありますが、まだ30歳で大きな可能性を秘めている青年世代だと思っています。

推進センターは、設立当時日本青年国際交流機構（IYEO）の活動が広範囲で活発になり、その事務局機能と国際交流事業の受け皿が求められていたことを背景として、現在と違い財団設立のハードルがとても高い中、旧総務庁青少年対策本部、IYEO関係者ら諸先輩の並々ならぬ努力で設立されました。

設立の年には、皇太子同妃両殿下の御成婚事業として国際青年育成交流事業（現在の国際社会青年育成事業）が開始されたほか、東南アジア青年の船の国際大会（SIGA）が日本で開催され、IYEOの全国大会が客船「ふじ丸」船上で開催されています。

設立時はわずか３人のスタッフでしたが、事業運営中の突発的な危機や事業見直しなどの困難に直面しながらも、スタッフは質量共に充実し、多くの政府事業だけでなく多様な自主事業を展開してきました。

2002年には国際交流リーダー養成セミナー、2005年には国際理解教育支援プログラム、2008年にはタイ王国スタディツアー、2020年にはイスラームセミナーが、それぞれ開始され、推進センターの経験の蓄積と幅広いネットワークを生かしたユニークな独自事業が育ち定着してきました。

2020年に理事長に就任したと同時に、世界中がコロナ禍に突入し、対面での国際交流ができないという厳しい状況に直面しましたが、様々な支援策や職員･関係者の努力により何とか乗り切り、今年無事に30周年の節目を迎えることができました。

本誌は推進センター発足の年に創刊されましたが、「マクロコズム」とは自分という小さな世界（或いは日本という島国）＝小宇宙に対して大宇宙という意味です。大宇宙から見れば、地球上の民族、文化などの違いは多様な美しい輝きを放っているように見えるのではないでしょうか。国際交流を通じて小宇宙から脱して大宇宙からの視座を持ち世界の平和に貢献できるようにという願いが込められているように思います。

この7月に30周年イベントを開催し多くの関係者に来場していただきましたが、皆さんの国際交流にかける熱い思いを改めて感じました。

そうした皆さんの思いに応えられるよう、次の40周年に向けて、新たな歩みを重ねていきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

理事長　駒形 健一

一般財団法人青少年国際交流推進センター設立30周年記念イベント

事業報告

国際交流リーダー養成セミナー

令和６年3月10日（日）、IT・エグゼクティブ向け同時通訳、株式会社リリーズ・トランサポート代表の莉々紀子氏をお迎えし、「グローバルコミュニケーションの未来～ロジカルな対話のすすめ：お互いを認め、異文化理解を促進するために～」というタイトルで国際交流リーダー養成セミナーを実施し、30名が参加しました。

ここ数年で海外から日本を訪れる人が増え、旅行や留学などを通じて国際交流がより身近なものになってきました。そのため、「価値観の違いを受け入れる」ことや「多様性を認める」ことが大切だと分かっていても、具体的にどのように考え、行動すればよいのか迷うことがあるかもしれません。グローバリゼーションという言葉が定着した今、改めてコミュニケーションのあり方を考える場として、本セミナーが開催されました。

時間	内容
9:30	事務連絡・講師紹介・イントロダクション
10:15	グローバルコミュニケーション ①講義　②ワーク「自分の先入観を知る」
11:45	ランチ懇親会
13:30	ロジカルコミュニケーション ①講義「ハイコンテクストとローコンテクスト」 ②ワーク
15:00	休憩
15:15	通訳者からみるコミュニケーションの極意・シャドーイング等の英語勉強方法
16:15	まとめ、集合写真

講義では、コミュニケーションにおいては、言語情報（メッセージ）より非言語情報（声のトーンや表情）のほうが重要であることを学び、異文化コミュニケーションを疑似体験するワークでは、皆が「無意識の偏見（Unconscious Bias）」を少なからず持っていることに気付かされました。様々なレクチャーやワークを通じ、参加者は自分のうちにある無意識の偏見を自覚し、互いの違いを理解し、関係を構築する能力である異文化コンピテンシーを身に付けることがグローバルコミュニケーションに不可欠であると学びました。

カーンチャナブリー県の児童養護施設で
子供たちと記念撮影をする

カーンチャナブリー県の児童養護施設で子供たちに折り紙を教える

FHCPで子供たちと海水浴をする

事業報告

タイ王国・スタディツアー2024

令和６年３月18日（月）～３月26日（火）の8泊9日の日程で「タイ王国・スタディツアー2024」を実施し、大学生及び社会人を含む参加者9名と同行職員２名の合計１１名が参加しました。

このスタディツアーは、タイの児童養護施設３か所を訪れ子供たちの生活環境を知ることと、現地で行われる子供キャンプ「For Hopeful Children Project (FHCP) 2024」にボランティア・スタッフとして参加し、現地の実行委員と協働することを組み合わせ、2008年３月から実施している（一財）青少年国際交流推進センター独自のプログラムです。

FHCPとは、「東南アジア青年の船」事業タイ既参加青年ウィスィット・デッカムトーン氏（Mr. Visit Dejkumtorn）が、自身のネットワークをいかして1991年から30年以上にわたり継続されている慈善事業です。孤児や難民、障がいを持っているなど社会的に恵まれない状況にある子供を「希望あふれる子どもたち（Hopeful Children）」と呼び、今回は、約800名の「希望あふれる子供たち」をタイ王国海軍施設に招き、海水浴や様々なアクティビティを行いました。

参加者は、FHCPのボランティア・スタッフ約50名と共に運営に参加し、子供たちと共に生活・活動することを通じて、国際協力活動を実践し、国際協調の精神を養いました。FHCP前には、子供たちが生活する児童養護施設3か所を訪問し、子供たちが置かれている状況について理解を深めました。

日程	活動	宿泊
3月18日（月）	バンコク集合・準備研修	バンコク
3月19日（火）～20日（水）	児童養護施設に宿泊、ボランティア活動や川遊びを体験	カーンチャナブリー県
3月21日（木）	バンコク郊外の児童養護施設を訪問	バンコク
3月22日（金）～25日（月）	子供キャンプFHCPに参加し現地ボランティア・スタッフと協働	チョンブリー県
3月26日（火）	バンコクにて解散	

FORDEC（バンコク郊外の児童養護施設）で先生たちと記念撮影する

街なかで見かけた移動式屋台

FHCPで子供たちがホースセラピーを体験する

カーンチャナブリー県の児童養護施設の子供たち

参加者の感想（一部抜粋）

大野　さゆり

FHCPでは団体や施設経由で招待された1000人規模の子どもたちに対し、同数かそれ以上のボランティア（高校生から70代まで）が様々な形で関わり、3日間のキャンプを作り上げていました。企業協賛として多くの金銭的、物的、人的支援が入り、連日数十の屋台が無償で飲食物を提供していたことには驚かされました。そこにはいわゆる「支援臭さ」は皆無で、とにかく楽しいお祭りとして運営されていました。社会的養護、障がい、貧困、少年犯罪など様々な課題を抱えた子どもたちが集まっていたはずですが、一緒に食べ、遊び、歌い踊る姿からはそれぞれの子らしさがあふれていて、私自身が勇気づけられました。

FHCPの前には、FHCPに参加する児童擁護施設や貧困家庭支援団体を訪問しました。特にムーバンデックという幼小中学校を併設した児童擁護施設は、日本でも大いに参考とすべき事例でした。子どもの権利条約の草案が出されたのが1978年ですが、この施設は1979年にその草案に基づき設立されたそうです。子どもの権利条約が採択されたのが1989年、批准したのはタイ1992年、日本が1994年なので、いかに先進的な取組みだったかがうかがえます。

日本でも2023年4月に「こども家庭庁」が発足し、「こども基本法」が施行され、「こどもの権利利益の擁護」が明記されました。子どもの権利分野では残念ながら日本は「後進国」です。無意識に自分は（GDP的な意味で）「先進国」の人間であると思っていましたが、タイを始めとする各国の事例に愚直に学び続けねばならないと想いを新たにしました。

なんとなく海外に行ってみたいという学生の方にも、国内の子ども分野で**既に実践を積まれている方にもお勧め**できるプログラムです。これを読んでくださった方は、ぜひ次のチャンスに応募してください！

FHCPにて無償で飲食物を提供する屋台

FORDECにて子供たちと折り紙などで遊ぶ

カーンチャナブリーの養護施設で栽培されているカカオ（上）、飼育されている食用カエル（下）

カーンチャナブリーの児童養護施設で子供たちと交流する

事業報告

イスラームを知ろう！

セミナー開催報告

様々な人・考え・価値観を理解する一助として、（一財）青少年国際交流推進センターは、2020年から「イスラームを知ろう！」と題するセミナーやハラールフード料理教室を計10回開催し、延べ330名が参加されました。本記事では、令和5年度に実施されたセミナーについて報告します。

◆イスラームを知ろう！～トルコ料理教室（チーキョフテ）～【現地参加（東京都）】

日　時	令和5年6月25日（日）14:30～17:00
講　師	Kargi Kerem Kadir（ケレム）氏（Yıldız Turkish Restaurant オーナー） Kargi Mustafa（ムスタファ）氏（Yıldız Turkish Restaurant シェフ、元トルコ大使館シェフ） Ramazan Demiroglu（ラマザン）氏（Yıldız Turkish Restaurant シェフ）
参加者	20名

約1時間半の料理体験では、3名の講師から、チーキョフテ（クスクスハンバーグ）とジャジュック（ヨーグルトときゅうりの飲むサラダ）の作り方を学びました。

久しぶりの対面での料理教室開催ということもあり、参加者が料理作りをしながらコミュニケーションを深める様子も見受けられ、和気あいあいとした空間ができあがっていました。料理完成後の食事の際には、ドンドゥルマ（トルコ風アイス）とチャイをサービスしていただき、ほっとするひと時を味わいました。

Yildiz Turkish Restaurantオーナーのケレム氏（右）、シェフのラマザン氏（左）

調理に取り組む参加者

ドンドゥルマ（トルコ風アイス）を楽しむ参加者

◆イスラームを知ろう！～日本人ヤングムスリムのストーリー：マスジド大塚とともに「モスク/炊き出し見学」～【現地参加（東京都）】

日　時	令和5年7月22日（土）15:00～17:00
共　催	日本イスラーム文化センター マスジド大塚
挨　拶	クレイシ・ハールーン氏（日本イスラーム文化センター事務局長 ）
スピーカー	長谷川 護氏（慶應義塾大学総合政策学部 4 年 野中葉研究会ムスリム共生プロジェクト）
参加者	17名

日本で暮らす日本人ヤングムスリムの長谷川護氏をお迎えし、イスラームに改宗するまでの経緯や現在の生活等について話していただきました。その後マスジド大塚へ移動し、マスジド（モスク）見学を行いました。日本に暮らす様々な国出身のムスリムがお祈りに訪れていて、日本で暮らすムスリムにとって、マスジド大塚が拠り所として重要な役割を果たしていることを目の当たりにしました。炊き出し支援活動ボランティアを行いながら、活動に参加されていた学生や東南アジアのムスリムの皆さんと交流を深めることもできました。

日本イスラーム文化センター
事務局長のクレイシ・ハールーン氏

日本で暮らすヤングムスリムの長谷川護氏によるセミナー

ボランティアと交流する参加者

◆イスラームを知ろう！「日々の暮らしに生きるイスラーム文明」現代社会の礎はイスラーム科学で大きく拓かれた～【オンラインセミナー】

日　時	令和5年9月23日（土）15:00～17:00
スピーカー	ハムダ なおこ氏（日本UAE 文化センター代表、作家、翻訳家、エッセイスト）
参加者	33名

イスラーム文明とは何か、現代科学の発展にどのように寄与してきたのかを身近な生活に根付いた視点からお話しいただきました。イスラームでは礼拝が重要視されていたことから、メッカの方向やラマダーンの期間を知るために天文学が発展したことや、喜捨（1年間の余剰財産の決まった割合を感謝を込めて神様に還元する➡人の手を通して貧しい人にそれが回っていくこと）の割合を計算するために数学が発達したことなど、文明の発達にイスラーム科学が大きな影響を与えていたことが分かりました。参加者からは、日本の教育内容がいかに欧米の世界観に偏ったものになっているかを知って驚くと共に、今後も本当の歴史をもっと学んでいきたいと感じたという声が上がりました。

事業報告

国際理解教育支援プログラム

一般財団法人青少年国際交流推進センターは、2004年度より、日本の教育機関や地域施設等に内閣府青年国際交流事業の参加経験がある在日外国青年等を講師として派遣する「国際理解教育支援プログラム」を実施してきました。国際理解教育に対する熱意を持つ人材を派遣して、国際理解の推進に資することを目的としています。本号では、2023年８月から12月に行われたプログラムについて報告します。

【第１回】東京都立立川国際中等教育学校附属小学校（8月26日）

1、2年生（140名）を対象に、外国人講師（ベトナム）２名を派遣。外国人講師の国の紹介（位置、世界遺産、食べ物、民族衣装など）の後、外国人講師の国の遊び等を児童と一緒に行いました。

講師の感想　ダオ・ティ・フォン

国際理解はとても大事なことだと思っております。私は北部ベトナムにある村で貧しい4人兄弟の長女として生まれました。儒教の影響がまだ強く、女性は大学進学や留学することがあり得ないと言われています。私は自分と家族、ベトナムの人々の生活を豊かにしたいと思い、18歳の時に一人で日本に留学しました。留学がきっかけで、異文化の理解だけでなく、日本での学びの機会は、私の価値観と人生を大きく変えました。日本で身につけた異文化経験、語学力、新しい価値観などを活かし、いつかベトナムをより良い国に発展させていくことに貢献できると信じております。

私は子供たちだけではなく大人でも異文化を経験し、他人・他国・他地域の文化、価値観を理解し、受け入れながら、自分の価値観や自分の夢を持ってほしいという強い想いがあります。そのため、日本とベトナムの文化などを発信するため、現在ボランティアとして在日ベトナム学生青年協会（VYSA)の副会長をしております。VYSAは2001年10月11日に設立され、在日ベトナム人の若者が主体となって活動している独立・非利益団体です。弊会は在日ベトナム学生青年を代表する、ベトナム政府公認の唯一の団体としての誇りを持ち、日本全国で活動を行っております。私たちの使命は「在日ベトナム人の若者を支えるとともにベトナムの文化を発信していく」で、活動方針は「各自の能力を最大限に発揮し、互いに助け合い、最良の組織を目指す」です。

今回、立川国際中等教育学校における国際理解教育支援プログラムに参加させていただいたことをきっかけに、ベトナムの文化を日本の子供たちに発信することができ、未来の日越友好関係に貢献できたと感じました。また、より国際的な理解についての必要性も感じられました。こうした活動を通じて、これからの日本をも変えていくことができると私は感じています。

今回のプログラムは、小学生1・2年生たちにベトナムの地理や、食文化（フォー、バンミーなど）、民族衣装（ベトナムには54の民族があります）、世界遺産（世界遺産ハロン湾、世界遺産ホイアン旧市街）などを紹介いたしました。

次頁へつづく→

←前頁からつづく

ベトナム語の挨拶（**xin chào** - こんにちは, **cảm ơn** - ありがとう)を教えたことを通じて、言語は違うけれど自分たちと同じ挨拶の言葉を持つ外国人を身近に感じてもらうことで、ベトナムについて興味を持ってもらえるようにしました。子供たちにはぜひこれから実際の生活の中で出会ったベトナム人に対して気軽に「**xin chào** - こんにちは」と話してもらいたいと思っています。最後に子供たちにベトナムのバンブーダンスを紹介し、一緒に遊びました。バンブーダンスはベトナムで旧正月やお祭りでよく行われています。

小学生たちは、とても明るくて、海外の文化に興味を持ち、好奇心旺盛な子が多かったと感じました。ベトナムに関して食べ物、世界遺産、少数民族の衣装などだけではなく、ベトナム語とバンブーダンスの遊びにも興味を持っていただきました。子供たちの中にも、ベトナムに行ったことがある子や、ベトナム語が話せる子もいました。私もとても嬉しかったです。

国際的な異文化交流といった活動は非常に有意義な活動だと思っております。日本は島国であり、ある意味、異文化との関わりがまだないところもあると私は感じています。これから日本の社会問題を解決し、海外との友好関係を作っていく子供たちや青年などに、本プログラムは必要な活動だと思います。

【第2回】茨城県立並木中等教育学校（10月14日）

ファシリテーター１名とディスカッション・パートナー８名（ペルー、バングラデシュ、エジプト、スリランカ、インドネシア、ウガンダ、アメリカ、ブラジル）を派遣。５学年（高校２年生、約140名）が八つのグループに分かれて自己紹介し、八つのディスカッション・トピックに沿った各国事情を生徒が外国人ディスカッション・パートナーに質問した後、生徒から日本事情をプレゼンテーションしました。その後、ディスカッション・パートナーから生徒へフィードバックを行いました。

生徒の感想　伊藤遥陽

初対面の相手に英語で話しかけるというのはとても勇気がいることだと思う。しかし、勇気をふりしぼって初対面の相手に、ましてや外国人である相手に話しかけてみる。するとどうだ。自分が思っていたよりも会話が弾み、楽しいではないか。私は、遠く離れた外国からいらっしゃった人と共通の話題を持って、英語で議論できることが例えようもなく嬉しくて、高揚感に包まれた。まるで、今までの英語学習が無駄ではなかったことを証明してくれているようだった。話す前の緊張感など忘れ、あまりに興奮していたため、頭の中は真っ白で気合で口から英語をひねり出すような、そんな状態であった。
55分間のディスカッションがまるで一瞬のように感じられ、授業が終わる頃には座学とは思えないほどの量の汗をかいていた。授業時の、英語で外国人と議論ができているという気持ちよさや全能感は未だにはっきりと覚えている。

そんな、私にとってかけがえのない経験となった今回の国際交流グループディスカッションは、55分の時間で様々な国からいらっしゃった外国の方と教育や文化など広くに渡るテーマで議論するというものだった。普段、海外に目を向けることが少ないため、自国と外国の文化の差異に驚かされるばかりであった。その中でも、共通する話題はあり、それが話題の中心として話が盛り上がった。今振り返ればもう少し文化的な差異について言及するべきであったと思う。しかし、外国の方と共通の話題をもって話すことができたのは大変貴重な経験であると思う。

並木中等生のようなグローバルリーダーを志す者が持つべき視点が国際的な視点であり、それは机に向き合うだけでは身につけることができない。海外と直接の接点を持つことで得ることができると思うため、今回のような外国の方と対面で議論し合うという機会はとても大切だと考える。

また、今回のディスカッションのような、生の英語に触れる経験は能動的につかもうとしないと得ることができないものだと思う。また、そういった生の英語に触れる機会からでしか学ぶことができないことが確実にあり、それがとても重要だと思っている。この機会は与えられたものではあったが、それを自分のものにできるかどうかは自分次第であったので、私はこのディスカッションを有意義な時間にすることができて大変満足している。

【第3回】中野区立江古田小学校（12月18日）

６年生（70名）を対象に外国人講師３名（エジプト、アルベニア、ブラジル）を派遣。小グループに分かれて、外国人講師と児童の自己紹介の後、児童から中野や江古田（地域）の特色、江古田小学校の生活、日本文化等の紹介を行いました。その後、外国人講師から児童へフィードバックを行いました。

内閣府の実施する青年国際交流事業への協力

一般財団法人青少年国際交流推進センターは、内閣府との契約により、令和５年度は以下の四つの交流事業及び青少年国際交流事業の活動充実強化に関する支援業務を実施しました。

1. 日本・中国青年親善交流事業（オンライン交流）

参加国・人数	日本（24名）、中国（25名）
日程	事前研修：10月1日、7日 オンライン交流「日中代表ユースフォーラム」：11月19日 事後研修：12月2日 オンライン事業報告会：令和6年2月3日
ディスカッションテーマ	新時代に求められる日中青年の使命 サブテーマ：文化、デジタル経済、気候変動（自然災害）への対応、教育、少子高齢化

2. (1) 日本・韓国青年親善交流事業（日本青年韓国派遣）

参加人数	30名（団長、副団長、渉外含む）
日程	事前研修：7月5日～8日（合宿）、7月15日、22日（オンライン） 出発前研修：10月16日～17日 訪問国活動：10月18日～11月1日 帰国後後研修：11月2日～3日 オンライン事業報告会：令和6年2月10日

(2) 日本・韓国青年親善交流事業（韓国青年日本招へい）

参加人数	30名（団長、副団長、通訳含む）
日程	8月22日～9月5日

3.「東南アジア青年の船」事業

参加国・人数	日本（20名）、ASEAN9か国の青年（90名）　合計110名
日程	事前研修：9月24日（オンライン）、10月28日～29日（対面） オンライン交流プログラム：11月12日、19日 対面交流プログラム：11月29日～12月8日 事後研修：12月8日～9日 事業報告会：令和6年1月21日
テーマ	「日本ASEAN友好協力50周年を迎えた新たな協力の時代に、青年ができること」

4.「世界青年の船」事業

参加国・人数	日本（93名、NL、SNL含む）、アルゼンチン、エチオピア、フランス、インド、アイルランド、ヨルダン、ケニア、メキシコ、ニュージーランド、ソロモン、トルコ、UAE、ザンビア（計130名、NL含む）
日程	事前研修：8月30日～9月3日 オンライン交流①：11月4日、11日、25日　　オンライン交流②：11月5日、12日、26日 オンラインツールにおける交流：11月4日～令和6年2月29日 対面交流：令和6年1月24日～2月21日 事後研修：令和6年2月21日～22日

「ブロックイベント」及び「青少年国際交流全国フォーラム」 実施報告

◆青少年国際交流を通して国際社会や地域社会への貢献を考えるつどい（ブロックイベント）

このイベントは、全国の４ブロックで、内閣府及び地方公共団体が行う青少年国際交流事業の既参加青年、国際交流に関心のある青少年等が、事後活動に関する情報交換や地域、職域の特色をいかした事後活動について意見交換を行うもので、令和４年度より第１部を内閣府、IYEO共催、第２部をIYEOと（一財）青少年国際交流推進センターが共催して実施する２部制の形式で実施することになりました。そうすることで、第１部では参加費無料を基本として広く参加者を募る企画とし、第２部では、より内容を掘り下げたり、参加者同士の懇親を図ったりする工夫ができる企画としました。令和５年度については、４ブロックの主催県IYEOがブロックイベント第２部をセンターと共催しました。

ブロック	開催県	日付	開催方法	第2部の内容
北海道・東北	秋田県	R6年1月20日	オンライン	「世界に誇る発酵の大地、秋田で醸される人材とプロジェクト」（第１部の発酵をテーマとしたクロストークを踏まえ意見交換）
東海	愛知県	R6年3月16日	ハイブリッド	「東海チャレンジャーズピッチ交流会」（海外派遣事業合同報告会、チャレンジャーズピッチ、ネクストアクションブース交流会）
中国（全国大会）	鳥取県	R5年9月30日10月1日	ハイブリッド	事業参加報告会＆懇親意見交換会、地域理解研修オプショナルツアー
九州	大分県	R5年12月3日	対面	内閣府青年国際交流事業＆IYEO活動報告（ワールドカフェ形式で小グループに分かれ各地域での活動について意見交換）

◆第30回青少年国際交流全国フォーラムの開催

9月30日～10月１日、全国から内閣府及び地方公共団体等が行う青少年国際交流事業の既参加青年等149名が鳥取県に集い、各地域における事後活動の推進状況を報告しました。既参加青年等の全国的なネットワークの構築など事後活動を更に充実させるための方策について積極的に意見交換を行っています。なお、この大会は日本青年国際交流機構第39回全国大会及び青少年国際交流事業事後活動推進大会と併せて開催されました。

懇親会で乾杯の音頭を取る（一財）青少年国際交流推進センター駒形健一理事長／懇親会で振舞われた豪華なカニ料理

「源流どぶろく上代」酒蔵工房を見学する参加者（地域理解研修オプショナルツアー）

「ラッピング列車で行く 水木しげるロード@境港」にて散策を楽しむ参加者（地域理解研修オプショナルツアー）

今月の表紙

青少年国際交流スタディツアー「タイ王国・スタディツアー2024」で訪れたカーンチャナブリー県の児童養護施設で子供たちと記念撮影。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年から2023年までは中止しており、本年は4年ぶりの実施となった。

MACROCOSM 10月号 vol.133

2024年10月31日発行
編　集　マクロコズム編集委員会
発　行　一般財団法人 青少年国際交流推進センター
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767　FAX: 03-3639-2436
e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp
URL: http://www.centerye.org/ (CENTERYE)
https://www.iyeo.or.jp/ (IYEO)
編集協力　日本青年国際交流機構（IYEO）
定　価　215円 本体195円
印刷所　株式会社シナノパブリッシングプレス
TEL: 03-5911-3355　FAX: 03-5911-3356

日本を元気に！

地域の元気は、日本の元気。日本の元気は、世界の元気。
笑顔が飛び交う社会をつくりたい。
わたしたちは日本を元気にするために、そのあふれる魅力を磨き、繋ぎます。

東武トップツアーズ
官公庁事業部
〒108-0075　東京都港区港南一丁目 8 番 15 号　W ビル 18 階　TEL 050-9014-8423

MITSUI OCEAN CRUISES

思いは、大海原の彼方へ。

憧れていたあの島へ、小説で読んだあの渚へ、思い出のあの港街へ。
お客様の思いを乗せて、美しい海へと旅をする、にっぽん丸のクルーズ。
スタッフの笑顔と、おいしいお料理、エンターテイメントでおもてなしします。

撮影：三好 和義

○詳しいパンフレットをご用意しています。最寄りの旅行会社または、下記へお問い合わせください。　※営業日・営業時間は変更・短縮、もしくは延長される場合があります。

商船三井クルーズ ☎0120-791-211 〒105-0001 東京都港区虎ノ門 1-1-18 ヒューリック虎ノ門ビル 11 階 https://www.nipponmaru.jp

マクロコズム　2024年10月号　通巻一三三号季刊発行　定価二一五円 本体一九五円 編集協力：日本青年国際交流機構